長期療養患者の自立への援助

中7階病棟　発表者　牧野内　和　子

片　桐　和　子　古　畑　とり子　滝　沢　順　子

竹　淵　睦　子　高　橋　美恵子　藤　沢　允　子

はじめに

わがままで依頼心が強く、長期間の闘病生活を送った患者さんの看護について一症例をのべます。

患者紹介

氏名　○原○さん　３８才　男性

職業　飲食店経営

病名　結核性腹膜炎

同胞　男ばかり４人兄弟の末子

現在の家族構成

本人　妻　１３才女児　他同居人多数

性格

あまえ、依頼心が強い、お人良しで神経質

現症状及び経過

昭和５０年２月感冒にかかり肺炎と診断され某病院に入院。抗生物質等の与薬を受けるも、弛張熱が続き精査目的にて、５月第一内科に入院。種々の検査施行するも診断確定せず、一時は敗血症を疑われた事もあり。胆汁より結核菌証明され抗結核剤使用された。しかし体温は弛張熱が続く。その後腹部に腫瘤が認められ、注腸バリウム施行、盲腸周囲膿瘍を疑い、第二外科転科となり手術の結果、結核性腹膜炎と診断され翌日、中７階病棟に転室となる。手術後解熱傾向にありましたが、低血圧、長期間の闘病生活、ステロイド剤の離脱症候群によるものと思われる嘔気、嘔吐、頭痛、倦怠感、食欲不振等の症状持続する。全身状態の改善及び副腎機能の維持、食欲増進を目的として、再びステロイド剤が使用される。嘔気、嘔吐、食欲不振等徐々ではあるが改善されるも、相変らず頭痛、倦怠感の訴えが多く、精神的な要素が大きいと考えられた。トフラニールを指示されました。その後訴えも少なくなり精神的にも落ちつき、６月５日退院となりました。

自立への援助

Ⅰ　創部が恢復すれば退院と言われていましたが、嘔気、嘔吐、頭痛、食欲不振、全身倦怠感等の訴えが頻回で、たとえば頭痛を訴え鎮痛剤を与薬するも、５分もたたないうちにブザーが鳴るという状態が続く。

○この注射は１５～３０分しないと効果が現われませんよと説明する。

o 世間話し等をして気をまぎらわす。
o 頭部の冷湿布。
o 頭部、頸部のマッサージ等。
以上の様な働きかけをしている間は気がまぎれているが、スタッフがベッドサイドより離れると再び訴えが多かった。

考察

スタッフが常にベットサイドにいないと、不安感が強く、すぐブザーを鳴らす。付添がいるにもかかわらず、ナースが付添っている状態が続く。その為に甘え、依頼心、わがままが強くでる。患者の要求にすぐ応えたことは反省すべき点でした。

Ⅱ　創部の恢復も良く医師より離床を勧めるも本人は消極的である。そこで訴えが多いことと、気分転換をも含めて車椅子での散歩を勧めてみました。初めは傷口に対しての不安、起き上ると嘔気、眩暈等の症状強く全く動く意欲はありませんでした。医師と付添さんと話し合い、検査の結果も異常がないから、この位の運動はさしつかえない、又傷口さえ良くなれば外来治療が出来る、ベット上の生活は他の臓器にもよくない事を話し励まし運動するよう働きかけました。又看護上付添者を昼間のみにしてひとりにする時間を長くしてみました。又他の患者さんにも、個室でしたが通りかかったら声をかけたり、気分の良い時は「ご」「将棋」などして協力してもらいました。その結果他の患者さんと接することにより、自分よりもっと苦しんでいる人達がいる事を知った様でした。
「痛い事ばかりが苦しいのではないんだね」「以前は４０度の高熱が出てもがまんできたが、手術後はがまんできなくなった」と色々の話しが聞かれました。
「短時間でも歩いてみましょう」「車椅子で散歩してみましょう」となるべく部屋より出る事を勧めました。傷口をおさえながらも車椅子にて散歩をする様になりました。

考察

手術をすればすぐになおると言われてきたが結核性であり、腹部にドレーンが３本も挿入されてなかなか抜去できず、それらも含めて意欲を失った患者さんに強く働きかけたことが良かったと思いました。

Ⅲ　４月２０日より６人部屋に転室する。他の患者さんにつられ、更に食欲も増し身心共に余裕が出てきました。散歩もする様になり、同室者と共に副食を作り間食量も増えてきました。

考察

副食を作るということに問題もあると思いますが、食事が進むにつれ意欲的になったことは良

かったと思いました。

まとめ

訴えの多い、わがままな患者さんを看護してみてこれで十分だと思いませんが、再び悪化させない様に自宅療養において同じ気持で耐えぬくことを話したり、お互いの信頼関係が出来た事は良い経験になりました。

長期闘病生活の心理状態等たくさん学びとることができました。